

IV 牧原千人塚の調査

牧原遺跡A地区の北東約10mにあるこの塚は、これまで千人塚古墳として周知されてきた塚である。Iで述べたように、この塚はこの地域では保存状態が良好な古墳であり、塚の周溝の一部が広域農道工事予定区域にかかるため県耕地課と協議を行い、この古墳を保存することを前提にその内容等の資料を得るため、確認調査をおこなった。

調査は、A区の調査と併行してまず墳丘の現状を測量し、その後周溝の範囲の確認と古墳の規模の推定を目的に、塚の周囲に4本のトレンチを設定した。

この塚は外観が半球状の土饅頭のように見えるが、測量の結果15m×14mの長方形プランを呈し、高さは約2mを測り、頂部は比較的平坦となっていることが確認された。墳丘はほぼ現状を保っているとみられ、傾斜が南面において最も緩やかであることを考えると、正面は南面であると思われる。またトレンチの調査では周溝は幅約5m、深さ約0.5mを測ることが明らかとなった。埋土の状況から判断すると、①周溝の土を盛ることによって墳丘を築造し、②その後盛土が若干崩壊して周溝内に堆積し、③長期間にわたって自然堆積が続き、④近世に至って耕地化するために周溝の外側をカットして溝を埋めならしていることがわかった。

周溝からは土師器片や砥石、鉄器などが出土したが、特に土師器片は小片で、図化できるものは少ない。

第38図の1・2は土師皿である。ともに底部しか出土していないが、1は底径9.6cm、2は8.2cm。どちらも磨滅が激しく、おそらく糸切り底であろうがはっきりと確認できない。2はかなり粗雑なつくりである。3は火鉢と思われる瓦質土器片である。体部破片のみで、法量は復元できなかった。4は砥石である。石材は安山岩系で、熱を少し受けておりもろくなって剥離した面がある。4面ともよく使われて凹面になっており、いちばん細くなる中央部付近で割れている。長さ5.1+ α cm、最大幅3.1cm。5は鉄剣の剣身部分である。両刃で中心にわずかながら鐔がある。身幅3.0cm。

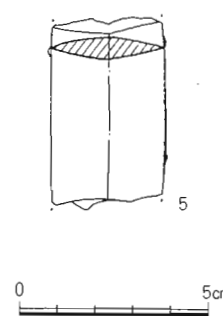
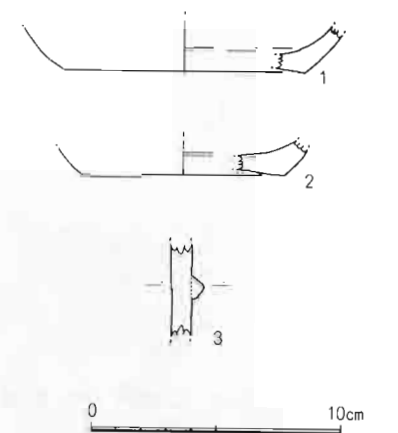
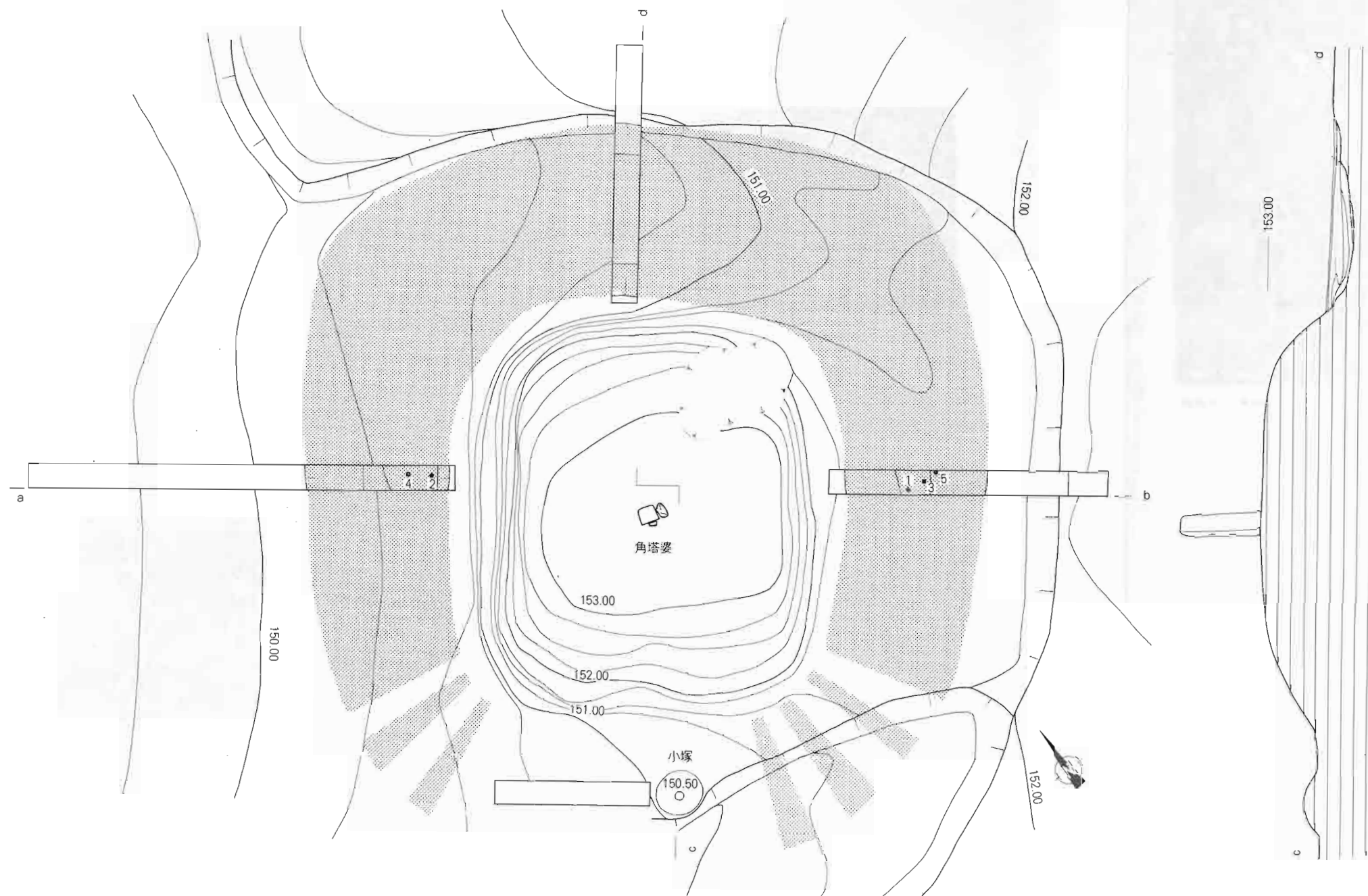
また、この塚の頂部中央には角塔婆が立てられ、塚の南側には小塚がみられる。角塔婆は一辺約0.8m、高さ約2.8mの角柱で、周囲4面にはそれぞれに梵字が一字ずつ刻まれている。(第39図参照)。小塚は直径約1.5m、高さ約0.5mである。

当初、古墳と考えられていたこの塚は、今回の確認調査により、中世の塚と考えられる。詳細については今後の調査に期待したいが、名称については調査結果を踏まえ「千人塚2号墳」改め「牧原千人塚」とする。

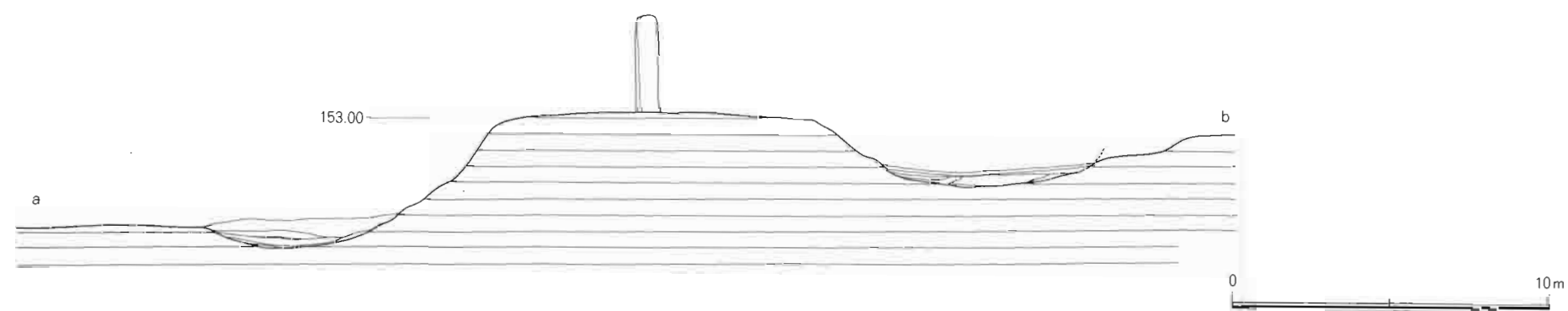
第5表 牧原千人塚トレンチ出土土器観察表

単位：cm

挿図番号	遺物番号	法量(①口径②器高③底径)	種別	器種	調整(①外面 ②内面)	色調	胎土
38	1	②1.9+ α ③9.6	土師器	皿	①②磨滅のため不明	淡褐色	赤色粒子 きめ細かな土
〃	2	②1.4+ α ③8.2	〃	〃	①回転ヨコナデ?②回転ナデ?杯底は糸切り?	〃	角閃石、長石、赤色粒子、砂粒
〃	3	—	瓦質土器	火鉢?	①突帯より上は不定方向のハケメ、下はヨコナデ ②5本/cmの粗い横ハケ	黄灰色	長石



牧原千人塚トレンチ出土遺物（1～3は1/3、4・5は1/2）



牧原千人塚測量図（1/200）

第38図 牧原千人塚(1)



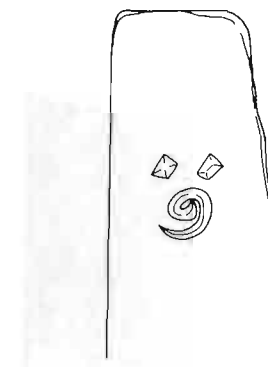
牧原千人塚全景



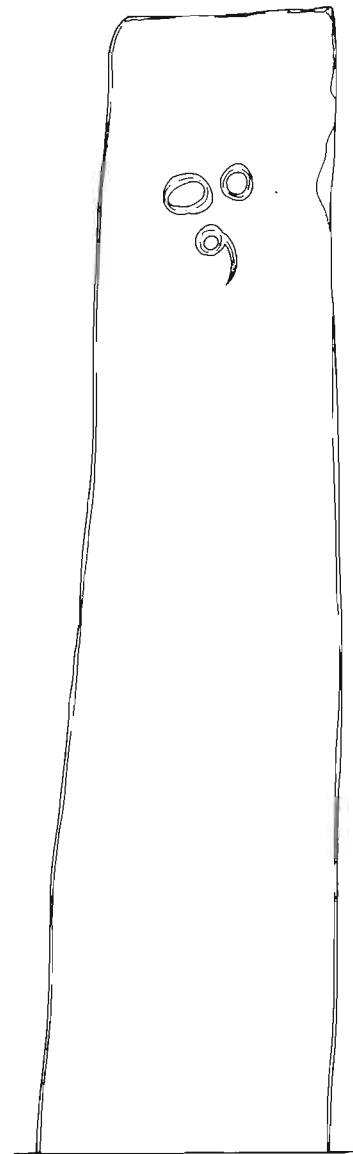
角塔婆（南より）



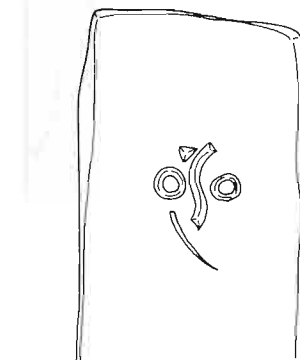
トレンチ内遺物出土状況



（東面）



（南面）



（北面）



（西面）



角塔婆（1/20）

第39図 牧原千人塚（2）